

2012. 3. 30 第 56 回国連婦人の地位委員会 (CSW) 等について聞く会 報告書

「国連へ行く」

NPO法人田舎のヒロインわくわくネットワーク 山崎洋子

2月27日午後、優先テーマ：「農村女性のエンパワーメント及び貧困・飢餓撲滅・開発・今日的課題における役割」に係わるハイレベル円卓会合に出席した。参加加盟国が2つに分かれ、日本はRound table Bに出席。98か国が次々とスピーチする。

農村は食糧を生産し、女性たちは安心して暮らせる農村地域に暮らしている。しかし、今なお、農村の貧困と飢餓、教育が行き届かないために識字率の低い国も多い。そのために女性に

教育を与え、技術を身に着け、経済力をあげ、子供たちの教育に当たり、技術や経済力を身に付けさせていく。それが世界的に急務とされている。そのためにミシンと裁縫の技術や、日々の生活費を稼ぐために、牛を飼い、牛乳を搾って経済力を身に付ける。開発途上国の国々からは、資金や土地の確保など様々な政策や取り組みが提言されている。妊産婦の健康や栄養失調の子供たちを守るための医療の在り方など。

英語を話し、エリートの教育を受けて、新しい男女平等の国を作ろうとしている世界中の、大国に負けない小さな国の意気込みがあふれている。

言葉も生活習慣も、社会の経済状況や政治状況もみんな異なる人々が集まって、貧困や際限のない女性の家事労働、しかも無報酬の労働、食料不足や飢餓や栄養失調…。それらの問題からどのように脱出するのか？語り合い、話し合い、脱出への道を探ろうとする人々の姿は壮観。

日本からは橋本ヒロ子代表が、国内の女性たちの自立とエンパワーメントを進める取り組みとして、家族経営協定を紹介された。

豊かになった日本は何を求められているのか？何をしなければいけないのか？法律と経済と外交と教育と医療と、限られた地球のπ（パイ）の中で資源と経済のバランスと調和をどのように維持して行けばいいのだろうか？

CSW56 公式文書によると開発途上国の86%の人々が農山漁村で生活を営み、約13億の人々が小規模な自給農業者と土地なし労働者で農業に従事している。その43%が女性であり、しかも女性の仕事の多くは無償である。貧困は圧倒的な農山漁村の現象であり、開発途上国全体をみると14億の極貧の人々の70%が農山漁村地域で暮らしているという。

2月29日は、パネルディスカッション。ジェンダーに配慮した統治、制度、役割に焦点を当て4人のパネリストが話題提供。農業生産の大元を女性たちが担っているにもかかわらず、土地の権利は男性が担っている。そのために起きる様々なトラブルを解決するために男女格差をなくするよう土地所有名義のプログラムを開発。また、種族間紛争の中で強制的に結婚させられる女性を救うためにネットワークを立ち上げ、貯蓄、融資、生活援助、技術援



助、女性リーダーの育成や暴力をなくする運動を展開する女性活動家の話。行政窓口を一元化し、アクセスを容易にしソーシャルカウンセラーを置き、女性にモバイルデバイスやインターネット・アクセスを増やす国の取り組み等が発表された。

飢餓があって、貧困があって、社会のシステムは男性中心で、女性自身の思いのならないままに働く仕事が多いが、農村の現場の女性たちはそんなに被害者だろうか？農村で食べ物を作り、安心して暮らしていける地域で女性や子供たちが虐げられた生活を余儀なくされているのは、男性の経済中心の価値観が大手を振って歩いているからだと考えられるが、女性たちはもっと女性たちの価値観でしなやかに生きようとしている部分のあることも国際社会で強調してもいいのではないか。



農山漁村の女性たち自らが立ち上がらなければ、基本的には何も変わらない。このことを伝えたいと思った。内閣府の男女共同参画局の岡島局長に「発言したいのだけどどうしたらいいですか？」と尋ねると、代表の橋本先生の所へ連れて行ってくださって「発表するときはこの J A P A N という表示を立てるのよ。」そう言って、橋本先生に話された。橋本先生は「なるべく短く言いたいことだけ、要点を明確に。それと私は代表団のメンバーで農業者である」と

いうことをきちんと言いなさい。」手短かに英語表現も教えてくださった。

「私は日本政府の代表団のメンバーで農業をやっています。農業女性たちのネットワークを推進し、グリーン農業を通じて生産者と消費者を結び、交流しています。日本の rural women は大きな可能性を持っていると信じています。」

議長に発言の機会をいただいたが、必死で不十分なまま、あっという間に時間は過ぎた。農業を仕事に選んだとはいえ、情けない英語力。いつの間にかどこかで語学を学ぶことを放棄した、錆びついた自分の頭のがっかりしてしまった。

雲の上の存在だと思っていた国連の会議も、現実の私たちの毎日とは決して無関係ではなく、すべてがどこかで日々の暮らしと直結している。豊かになった日本の農山漁村を含めた女性たちに求められているのは、女性として一人の人間として、意思決定の場に参加すること。命を守り育てるという視点を大切に、女性も男性もお互いに協力し、子供も若者もお年寄りも安心して暮らし共存できる国をめざし、行動し、社会の意思決定の場に参加すること。

膨大な時間をかけながら信じるに足りうる話し合いの場があり、集う場があり問い返す場があるということの幸せと希望。それができることが平和への基本であり、国連の持つ意義なのだ。豊かな日本の現実を見つめ、これからの世界への発信をどうしたらいいのか考えていた。